

Seiko Futureworks AIインタビュー ご紹介資料

セイコーソリューションズ株式会社
戦略ビジネス第3本部
support@seiko-sol.co.jp



全体サマリー

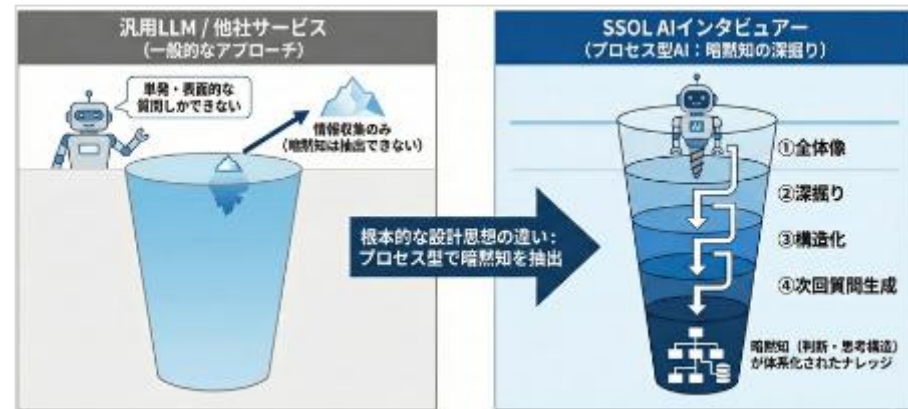
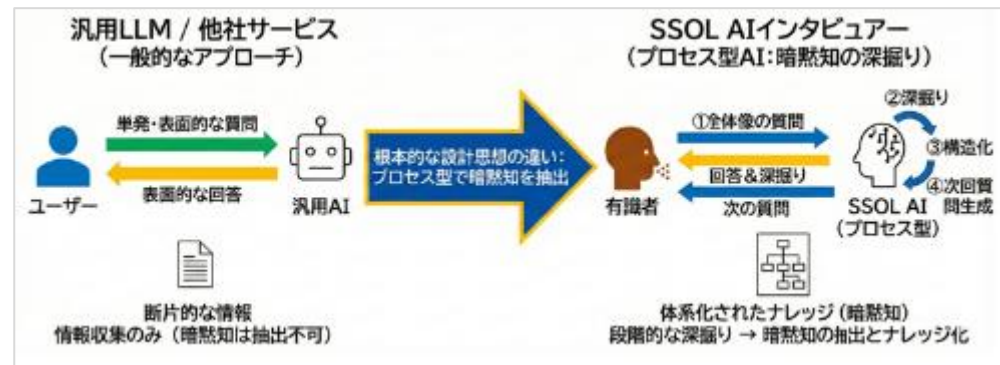
Seiko FutureworksのAIインタビュアーは、暗黙知（判断・思考構造）を段階的に深掘る“プロセス型AI”であり、他社サービスや汎用LLMとは前提の設計思想が根本的に異なります。

AIインタビュアーの特徴： 暗黙知を段階的に深掘るプロセス型AI



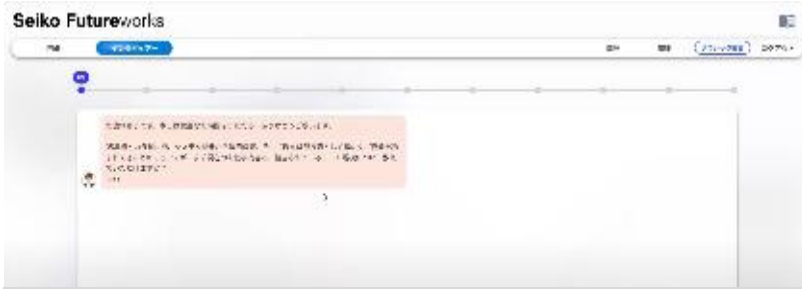
前提：知見は一回では取り切れない

(参考)汎用LLM/他社サービスとの比較



画面フローイメージ

Seiko FutureworksのAIインタビュアーは、①全体像 → ②深掘り → ③構造化 → ④次回質問生成という“プロセス型”で暗黙知抽出を行う点が、他ツールとの決定的な違いです。



①事前設定した対象者の情報や指示に基づいてAIが質問



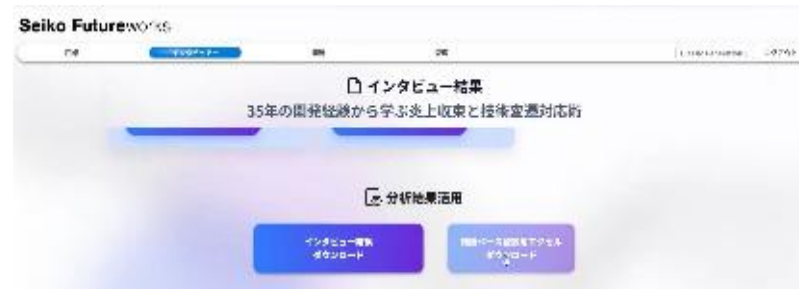
②回答を受け深掘りし、有識者の判断基準などを明確に引き出す



③インタビュー結果はわかりやすい形で生成。画面で確認可能



④より深掘りし、知見を得るための次回トピックも表示



⑤取得したナレッジはそのまま簡単に知識ベースへの登録やCSVでのDLが可能

企業の「プライベートAI」化は不可避

“現在、データの1%しかAIに食わせていません。残りの99%はみなさんの会社の中にあります。

つまり、みなさんの会社の中には、まだ非構造化状態でAIに食わせてないデータや情報がいっぱいあります。書類やみなさんの体の中にあるかもしれません”

(早稲田大学ビジネススクール 教授 入山章栄氏)

(引用) 「入山教授が語る、After AI企業になるために重要な両利きの経営を成功させる秘訣」
<https://news.mynavi.jp/techplus/article/20251017-3555751/>

社内の高度な知見を企業の競争優位性に変えるには

これまで各社は、企業独自のナレッジで競争優位を保ってきたはずですが、**有識者の頭の中だけにある知識は、その人に依存してしまっており、いずれ退職した際に企業としては大きな損失となってしまいます。**

その為にもAIを活用し、前項でも挙げた「暗黙知の形式知化」で会社のナレッジとして貯め、その知識を活用できるようにしておくことが大事であるといえます。

企業における知識のレベル分類

企業の競争力を左右する知識は「暗黙知」

企業に蓄積される知識は、一般的な公開情報、社内で形式化されたノウハウ、そして有識者の経験に基づく暗黙知に大別されます。中でも暗黙知は、個人の経験や直感に根ざした高度な知見であり、他社が容易に模倣できない競争優位の源泉です。

しかし、その多くは言語化されず、属人化しやすいため、組織全体での活用が難しいという課題があります。だからこそ、暗黙知を可視化し、標準化して共有可能な形式知へと昇華させることが、企業の持続的な成長と競争力強化に直結します。

Base Skill（一般的な知識）

一般的に公開されている誰でもアクセス可能な常識的なスキル。
但し、この情報は人格形成の上であくまでスタート地点の情報
(ITであればIPAの情報等)

Advanced Skill（形式知）

社内で文書化・共有されている、企業レベルでノウハウとして共有されているスキル・技術標準。
(ITであれば業務開発標準等)

Specialist Skill（暗黙知）

個人の経験や直感に基づく、言語化・形式化が難しいスキル。門外不出とされていたスキルではあるが、今後は財産として継承されるべきスキル
(ITであれば生産現場の有識者の暗黙知)

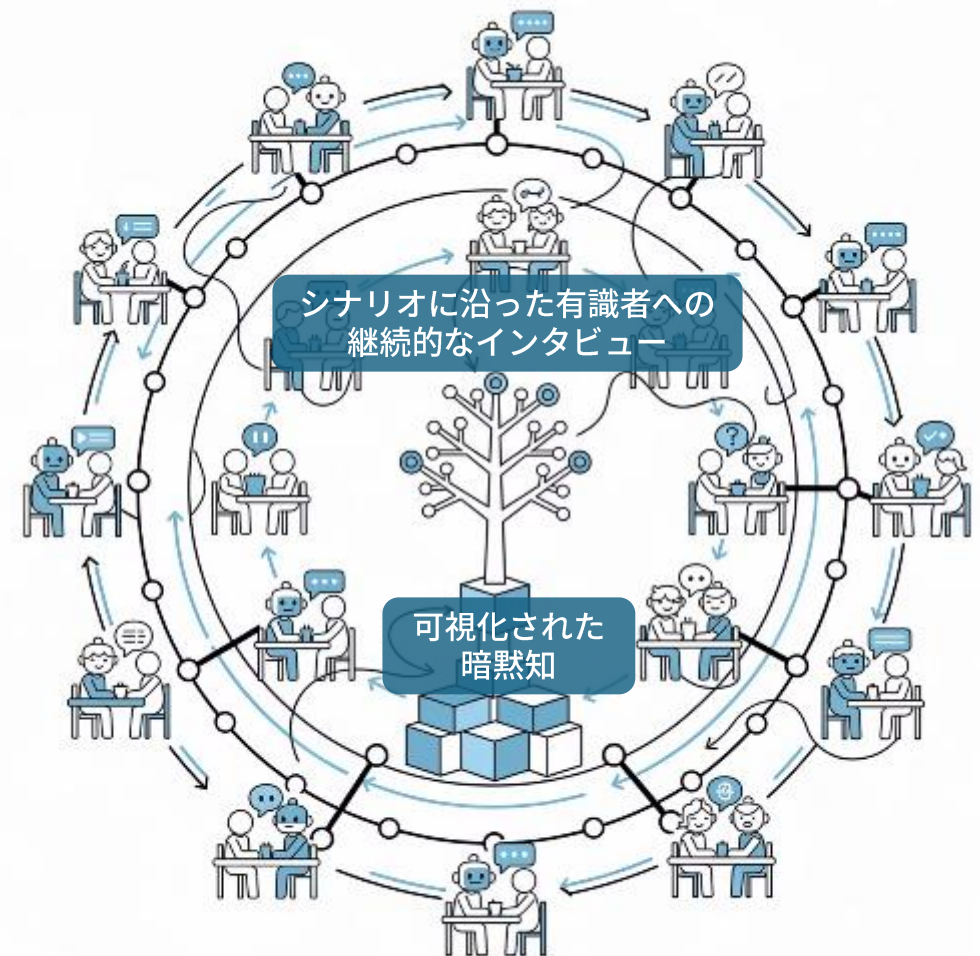
AIインタビュアーは「1回で終わるもの」ではない

有識者が持つ技術判断や経験則は、一度のインタビューで取り切れるものではありません。

設計判断に至る思考プロセス、リスク評価の根拠、代替案を検討した際の判断基準——これらの知見は、段階的に掘り下げることで初めて明確になります。

多くのAIインタビュアーは「その場で多くを聞く」「1回で完結させる」ことを前提としています。しかし、Seiko FutureworksのAIインタビュアーは、キャリア全体を起点に、重要な論点を見極め、段階的に深掘りする設計を採用しています。

Seiko FutureworksのAIインタビュアーは「聞くAI」ではなく、「聞き続け、知見を育てるAI」



エージェント経由での
若い技術者への知識継承

AIインタビューアーの強み(1)

インタビューを"プロセス"として設計している

強み①:段階的な知見獲得

まず全体像を把握し、重要な論点を整理します。
AIが「次に何を聞くべきか」を設計し、複数回のインタビューを前提に知見を段階的に深掘りしていきます。

強み②:結果を次の質問設計に活用

インタビュー結果をAIが整理・評価し、次回インタビューのテーマを自動で提示します。
人手に頼らず、インタビュー全体を一貫したプロセスとして回すことができます。



単発のヒアリングではなく、組織として知見を蓄積するためのインタビュー設計を実現しています。
これにより、有識者の暗黙知を体系的に引き出し、次世代への技術継承を支援します。

AIインタビュアーの強み(2)

AIインタビュアーは、従来のヒアリングでは難しかった深層の知識を抽出し、組織の持続的な成長に貢献。

強み③ 技術判断・思考構造の深掘り

設計根拠や思考プロセスなど、最も難解な知識を対象とします。「なぜ」を深掘りし、本質的な知見を引き出します。

強み④ 知見の組織資産化

インタビュー結果を、構造化データとして内製AI基盤へ連携。特定製品に閉じず、組織全体の知見として活用し、価値を生み出します。

強み⑤ 対話の人格・振る舞い・ 進行シナリオを柔軟に調整可能

対象者や利用目的に応じて、システムプロンプトでインタビューの進め方を調整可能。無理なく話しやすい対話体験を提供します。

□ 今後の機能

インタビューの安定性を高めるための設計（2月リリース予定）

複数の視点を組み合わせた、協調型インタビュー設計

- 単一のAIによるインタビューでは、質問の方向性や判断に"ゆらぎ"が生じやすい
- Seiko Futureworksでは、複数の視点を持つAIが並行して対話内容を整理・評価
- 結果を統合することで、より安定した、客観性の高いインタビュー結果を得られる設計

AIインタビュアーの違いは「どう聞き出すか」ではなく「どう設計しているか」

SSOLのAIインタビュアーは、暗黙知を「一度で聞く」のではなく、全体像を描いたうえで、段階的に深掘りする設計を最初から前提としている。

AIインタビュアーは表面的には似た機能を持つように見えるが、その設計思想には本質的な違いが存在する。単発完結型、場当たりの深掘り型、プロセス型育成型という3つの異なるアプローチは、それぞれ異なる前提に基づいて構築されている。

他AIインタビュアーサービス

前提：1回のインタビューで完結

- 1回の対話でできるだけ多く聞く
- その場で整理・可視化
- 単発完結を前提とした設計
- 👉 単発完結型のインタビュー設計

汎用LLM

前提：その場で質問・応答する

- 質問はできる
- それっぽい深掘りも可能
- しかし：全体像を描かない
- 何を深掘るべきかの設計がない
- 掘り方が一貫しない
- 👉 場当たりの深掘り

弊社AIインタビュアー

前提：知見は1回では取り切れない

- まずキャリア・経験の全体像を俯瞰
- 重要な論点を特定
- CIT (Critical Incident Technique) を前提に、成功／失敗、判断の分岐点、背景・制約、代替案を整理
- 「どこを掘るか」を決めてから、段階的に深掘り
- 👉 プロセス型・育成型のインタビュー設計

単発型インタビューと、段階型インタビューの違い（受け手視点）

単発型インタビュー（多くのAIインタビュアー）

受け手の状態

- △ 何を求められているか分からない
- △ どこまで話せばよいか迷う
- △ その場で思い出しながら話す

起きがちなこと

- ✖ 無難な成功談に寄る
- ✖ 判断の背景や迷いが語られにくい
- ✖ 「あとから思い出した」が残る

→ 話す側に負荷がかかるインタビュー

弊社の段階型AIインタビュアー

受け手の状態

- ✓ 最初にキャリア・経験の全体像を整理できる
- ✓ 今回は「ここを話せばよい」と分かる
- ✓ 前回の話を踏まえて続きから話せる

起きること

- ✓ 判断の分岐点を自然に思い出せる
- ✓ 「実はあの時こう迷った」が出てくる
- ✓ 話すほど思考が整理されていく

→ 話す側の思考を支援するインタビュー

□ Seiko FutureworksのAIインタビュアーは、有識者に「どう話すか」を考えさせない設計を採用している。